

明和五年刊

俳諧江戸返事

全

な	く	か	か	な	か	は	ふ	い
う	ま	ろ	い	う	き	る	り	つ
け	の	し	の	い	か	の	を	し
ら	、	そ	み	ほ	た	あ	の	か
し	ろ	の	ち	り	よ	け	つ	け
こ	ろ	か	ね	た	り	ほ	か	し
れ	の	か	も	つ	な	の	ら	き
を	け	し	こ	ね	に	に	ひ	た
ち	ま	あ	ろ	て	し	い	と	た
な	ゆ	り	に	せ	お	き	の	つ
め	ふ	け	と	ろ	お	こ	こ	か
る	の	る	ひ	そ	ふ	と	、	す
ひ	へ	を	こ	こ	す	と	ろ	み
と	た	と	を	を	み	は	も	に
く	て	り	せ	よ	た	ん	の	こ
く	あ	て	る	せ	か	と	ひ	の
に	き	み	に	ら	は	み	ら	め
み	こ	み	み	れ	の	や	か	う
せ	、	み	つ	は	こ	こ	な	ち
は	ろ	み	か	い	な	ち	る	け



志のれは俳諧のみさかりなること都鄙のわ
 いため厚く、鯉漢牛道にももてあそび、春の
 衣の咲たつかごとく、秋の丹の隈くを照す
 カニとく彼は女唄を傳へ、是は其風をいろむ
 と家く、の門戸敷ふるにしほ、指を屈す、
 さいか中に錦城下の作者をさして遠境の人は
 江戸風といひ、近くはうせ世風といふ、いか
 なる風調をもてか、くは唱侍るにや、うり尋ね

摩訶寫瑤山口述上略



やとしのうきうきにけりたちしことほをほしめく
 水なるのこそめのむめあるはも、ちとりのさ
 へつりよもきふのかとのやあきのいとにより
 くるはるのなさをあつめたとちふみとなし
 よしやよしの、みちのしをりにもたうらんや
 とさくらきにはつすえのつみとかほしなとの
 かせにふきはうはせたまへとあまみんあみに
 めさたてまつりてしなとのみまね

陸月之日

もくはいは、あけすもかたしりあす
 神代のおし 天の浮橋のことほをもと、し
 て、道は口交心怯あう 名は久あゑの天か下
 に久しく 當時の明師あゝ ひとたひ花
 のもこの勅許を給り 其風作は世々に別るゝ
 とりゝとも 其すあはは千歳不朽なる心 貞
 享元祿の頃 何れを存けしめん 風節を足届
 躬恒費之の作 採り 杜子美李白の風骨に
 入て、玄妙の句あゝ、是すり天下挙つてはい
 かい中興の開祖と稱し、 東はあいろこいろの

山を越 西は月の入わたつゝいまて 風蕉門に
 あがさるは十か一なり されは其門葉二千有
 餘人の中にし わけて執心の人くをいは、千
 人をすくり百人をすくりて 京都に去来 難波
 に之道、 江戸に其角尚書 近江に許六 李由正
 秀乙州 伊賀に土井 長崎に卯七、 伊勢に涼
 菖 尾張に越人 荷今野水重五 美濃に支考、
 加賀に北枝 出羽に不玉 越外国く 所く秀
 才の弟子あまたなる 其人く の風調をう
 つし 左中は 今あ の風この風と 別に いろ道

理なきにしもあらず さハ江戸にあたりの高
 弟ある事ハけせを合の口すやみにも妙庵に桃
 さくらあり門人に其角流電を持ちとほ世人し
 了所あり 市井の江戸風る世風といへるハ
 其角の餘裔なりし 今世江戸風といへば
 蕉風にあらずき世風といへば見るとたにおも
 しろしと思ひ給ふ人多かりけるにや 吟腸
 はらしあハ蕉翁の存ありたハ名目ハ蕉門
 なる一。爰にいけんにけやり小吹狂言倭語
 をさ一都會を慕すといふ事なし いか存ハば

俳諧ばかりかゝる疑惑のありけるもいといふ
 かし、~~女~~けせ妖術伊賀の因の是たりといへるも
 俳諧は季吟子を師とて道を説に望こハけしめ
 京都に一廬を結結び給ふにありすや、遠く唐土
 にも詩客文人長安に出て切磋琢磨せられたりし
 多しと云 当時漢魏のいにしえもおよほぬ京
 都の結構難波の繁華はいふも更あり 輻湊の
 錦城下の風調高しとせんやひくしとせんやま
 つ江戸の風調は洒落にして汰達なり、其流風
 は其角の存ありを包、其角の風調にていくは

くの人を徘徊しみるひきたるとほせ、秋翁の歌、
 美もな、あ、と去来か、贈答の文に明らか
 リ、又、流雪、ハ、句、之、翁、之、鏡、中、の、す、か、た、水、面、の、か
 たち、手、に、取、こ、ふ、た、つ、を、合、さ、る、こ、と、
 た、る、を、も、て、雪、の、う、ろ、の、ち、せ、秋、の、い、つ、甲、中、の
 す、か、た、と、い、ふ、法、に、も、と、つ、さ、雪、中、巻、と、別、号、と
 か、う、あ、う、け、る、と、そ、此、二、門、い、つ、れ、も、上、午、と、い
 は、ん、や、去、人、と、い、は、ん、や、
 其、角、門、弟、
 堤、亭、

雨にこほなかりけるそや夜明の蚊
 堤亭

新月の島繪ゆかききたよりかな、
 楓子
 揚貴妃の鬢にも吹やあきの風、
 原松
 くるすの葉のうらハ、
 貞佐
 とほし火にあかひなし、
 鼠肝
 舟けりのあけもろ、
 秋色
 嵐雪門弟、
 東潮
 きり、すあ、ら、は、に、葛、の、唐、葉、哉、
 舟竹
 居位、辰、も、あ、る、し、こ、け、り、大、う、ち、は、
 百里
 蚤に似て押へしむし、
 詠世
 けねはし、
 心届かぬ、
 世

招鉢の欠をとふう女斎坊主	朝魚の女房に死水子に死水	棚あゝ茶籠落す煉の夜	かりをしろし侍る又附合の句には	此人くにはあきうす水とも思ひいつうは	蓮臺のなぐれと笠にかおりにけり	名月や夜半に水打つ真の店	二夜啼ぬと夜は寒しきりくす	落る日のいときや相の二葉まで	うくひす女枯たの中葉又けり
					米仲	蒼狐	紀逸	起波	曲卷

い

あまうそや芝に月うつもるい	名月や欠のけとの水のとう春	水仙に名所のあきそううみなり	口切や内義をきけは水あうさき	打破水のうら欠る氷か左	水江戸の秀作者あり此時代を過て	是等の句にみきらす流風あり寂ありいつ	しら真や子にまよひゆく隅田川	色のくには火入ひとつ蚊を裁	ほろみうや流るゝ水のいつこまで
乾什	和推	貞山	春来	流山			更登	神寂	氷花

これさ市由儀 此れさ市亭主

女の書た 譬喻 品すあ

たそろしのおか 三浦か年のく水

二人比々尼の絵のおけり見よ

縫はくに吉備大臣の跡をたれ

皇水て起清の文にゆきつまり

向ふの膝へ我かまゝかあ

香しき花に解て 是こま だ

萬のほほると後家をさし歌き

懐女 法達自在を見結へしあも前句よりけりす

かた后しかにして句作の花やか誠に滑稽なり

また其比点とりにて高きの句とて 開き入りたは

飛行のにくさ 雲に 立膝

鍼立ひとく 定 鳥羽の向

忘りをつく 夜に燃るさんまひ

土堤めく蛇のおつる 空天

時雨を拭て拂しり 欠る

若死をするたし 後家のかへりて

田舎を望のころける いつくしま

いそりつゝ 飯喰朱壁のくす明り

草狩の逸 赤谷へ 鞆はしり

眼をややめはせめすかたのろしろ帯

此時代より附意は大阿ふすしあふと一句に

餘意のある所作も上手なり其者も上手あり

句にあんけんのあり所糸一しり給ふ一し又

一句たちといへるには

近眼のなまじく焼香をけす

背あしの合羽門ととかめり

ほれくわて辰の替女の園雨

大鳥まては久る恨人のゆめ

志賀は小玉の種にそ有ける

世はかくくりの福寿帳さく

鎗が降つても武士のきめ

吉原へ妻子もつ水てか、み山

時雨すゝ出雲の空は表あき

行平の床所かほる月あた夜

門松の穴もこ、ろり置ところ

行燈にすゝ氣うつあぬ 暇乞

いはて只二日にあたり隙をや

面白い人といけりて 卍の巻

是等の句も一句おゐるて願をこく甚し

御たつねのうき世風江戸風と稱するハ此前後

の作ありし 此外をいは、中頃不角といへ

る点なき 此高貴の句とて聞きへ侍るには

山葵もおもん 辛勞の肌

鶉 鶉はしらす鳥は月花の水せり

曉の月や夜のすかたえ

心中は甥といふ字かあゆむあり

ほしめの句は九川を決て四海に致し映滄を

後これと川にいたすとある 高玉の辛勞を

思ひよせ鶉と鳥のひいかにて水せりとい作

たれと花実のねさ水ハ正風にあす 次の句

ハ男女つれ立といふ事を文字によせたる謎な

リ 句論俳諧といふ九種の一軒あ水と付合の

句の沙汰にのまよ聞さ水は蕉門にあす

りあま 此高貴者上りなり けせを流し心頭に

ほしたひけるにや

靨をかくす 皺面のあた

御意のやとて丈に際ハくわす

かゝ了句も高貴をかり 猫みらわりの花句に

松とりて常の旭と有りけり

不角

又五色すやと祢せし人

ハ

唐門に鳥さへ春の名残かお

琴和

膝立てこなたの山やけふの月

宗瑞

六月の地獄にもさく蓮かな

珪林

長き日やたなし事して磯の浪

馬光

青柳やニすし三すし老木より

柳居

りづれも句と衣やかにして忘りし書とをな

へ虚をあらふ作者たりすくは法蓮酒席のと

ころに滑稽談笑は多きものなり 爰に小意の

譬喩をいかに 鈍き又ものを遣ふ時及博の

たかしをいかにとて是はよく切るといれを

剛毅木訥の人はまことに鋭名作と思ふなる

しはいかいの虚言と一に近し虚には

いかいあり實にはいかいあり 自然と風姿風

情をそなへたる物あり 言語あやをなすゝる

しりあり ちやし 菊園の附句に

何かあたつて及吐かつかすゝ

奥山に紅葉ふゝわけ 鳴鹿の

是手の付句理解義解にならず又味ひある一
 し ずて真者も自己の嗜好に落作者しを
 のれか好所に落つくは誹諧の意を得たりとは
 申すれず。誹諧の作を聞て正風にあらずと思ひ
 淋しき事をすむを蕉門と号へたる人くも多
 きにや。さりとてひたすらに誹諧洒落かよし
 といふにはあらず 俳諧にいひ出して用ひら
 ぬぬとあり 句に有りぬ物あり たとへば
 遺人とは八木やし 妓夫とは俗中の俗言あり 物
 嫁とハ句にも結けりか夜鷹といふなりす 此

境は言法筆端に述かたし、たせ致翁のことは
 にも俗談平話をらんかたありといふ復の事な
 らん 俳諧ハ新羅美象あますすらすすいひ
 かつる本水とそこに差別ありかしこに規矩準
 繩あり野と野なるさるとは人くくのこゝろに
 有一し もろこしの文に七下里巴人を教ふ時
 國中属して和するも教千人陽阿羅露をあり
 に和者數万人との陽春白雪に至りて和者十人
 とは宋玉か屈原の文章たり免と是等を玩味し
 結ふ一し 又 誹諧の趣意習ひやうき所あり 学

ひのたき所あり、少しは是を説ん

まつ初門人の人の答句ハリかやうにリ下し

小七のうやと問に 教教の人云四糸子の景物あ

あひは月雪あるひは花雪と、まさをあてひ五

七五十七字にひひいつりつり有り 和歌には

篇序題由懐といふあり、詩にハ起 請 将合あり

はらかいに序題曲の三を兼さるハ只こと、い

ふて ~~初~~ 答句にありす、其曲といつりありひ

ハ黒きを白といひ 非情を有情にするを曲とい

ふ物喰ハ眠 い と い ひ 雪降は寒いといふは あ る 只

ことなり、物して有る事有るあり、りに

いふてハ答句にありすと教人に其人又

古池や蛙飛ぶ水のをと

是を改翁の高吟にてあやなく忘らぬ人も

し 此句は蛙か飛ぶは水の音かする あ る

いつれの所か曲節にて名句にやと問 如時に

いたり説書のに幸我子貢の辨ありて問人に答

助か可あり 是の人には雛母か眼ありと い は い

かいの城にいたらぬ人になとちう一七通せり

かくいつねとてを改翁の句有るに あ る 只

はじめの哥は田子の浦に出た足た水ハ富士
 の雪が白いと一へるなる一し 後は白鷺のを
 のが羽をこほすにや 雪のありほのと曲節を
 つくしたる 一つ水も名歌なるにや、又白髪
 三々丈然によつてかくのこくと長しと曲節を
 尽したるあ水は沅湘日夜東流去愁人のために
 暫もと、まることとをせすと是ハ流る、水か然
 了人のためにと、まうぬは忘水事なり
 水ともしい くはくの心をあくることちりも名詩
 な水はにや 俳諧又かくのことし はせを翁

とするにはありす 尤こ水の一にありさうす今
 古の句とてそれ歌味熟澁しせり心既に解釈し
 せり号能者の名のこにめと、よしといひあし
 といへる人の多あつし されハ曲節を盡し
 たる句にも秀逸あり とうと作りたるに
 名句あらん、たとへば
 田子の浦に打出て水は白ぬの富士の雪根に
 雪ハ降りつゝ、
 飛霜ハ雪井途にり踏のをりか羽こほす雪の
 ありほの

の高吟は不立文字にて説き尽す前にいへる
 發句附句とも寂もさひにより花やか
 により善悪は句にありて風義にあ^らしり給
 よし 只あの風二の風と懐義にはしり其実
 の傳はうさる事歎くべきの一かたなぐすや
 菟にも角にも明眼の師にいつて一旦豁然と俳
 意を得るものなり、其得るものを教外別傳と
 もいへん爰に恐るべきたとへなかりむかし
 釋尊靈鷲山におゐてもろくの芥子にしめす
 時迦葉ひとり破顔微笑す此時秋尊のたまはく

吾に正法眼藏涅槃妙心真相無相微妙悟門あり
 摩訶迦葉に附屬すと悟は迦葉に傳うたるとにや
 又孔子の^例に子路曾皙冉有公西華居る時孔
 子曰人有二世達をしる事あり何を以用ひら
 小人と思ふにや、をのく試にいふしと時
 に子路は勇氣をたのんて千乗の國に軍ゆす
 其うへ鐵鎧ありと三年のうすに是をおさめ
 人といひ冉有は少しく謙退して小國の民を宥
 しめんと^る、公西華ハ禮樂に志せハ舌端の服
 を着章甫の冠を戴て小相とならん^たと思ひ

おもしろしといふをあちうにておもしろから
 すとし、あちうにてよしといふをこちうにて
 あし、といふはみなほいかいをしうぬ人のい
 へるならんたとへハ百世のあかしにせよ
 はいかいいといふもの出来た水ハはいかいい
 ふ名あう、其はいかいいといふもの甘きが辛き
 か辛きが丸きか四角かいつ水はいかいいといふ
 ものあるし、そ水に似たるをよしとし似れ
 つかさるをあし、とせんこ水をしる人すく
 なくしてこ水をつたふるもの多かす、そ水

に差けりの中に常哲は冠者五人童子五人を
 つくし、沂水のほとりに浴し舞雩臺より涼風をう
 けあひほろたひあるひは詠して帰ると魯
 けうを孔子のこころにかなひけ水はこそ夫子
 喟然として歎して曰吾點に與人の法あり是
 秘迦に孔子にも教外別傳の^顯然なるにや
 されははいかいいの奥旨をよき師についてよく
 執行せすんはいかてか大意をしらんやあ
 凡此の凡と名目はつたほつてはいかいいのつた
 いたりたる人もすくなかよし、まづこちうに

岐王岐女はたしてもとる差葉哉	猫の悪その中垣や籠丸	きろびて水にたかす、柳哉	舟の底の曲突塗土に蛙哉	した水こハ風追まくり柳哉	焼し跡も雨待ゆほの青みかな	ほ、きゝの人の戻て臍月	よくくみすの梅に暮して二月かあ	楸鯛や波しつかなる国の春	附録 句笠任到来
花	連	乳	枇	梅	栴	柳	婆	天	
明	丈	岸	鏡	勤	生	門	心	存	
					子	子	子	子	

をしりそよを傳ふるを明眼の師といふし
 その明眼の師といふははいかいたるふとそん
 し奉り候 領首

琴	曙	鶯	を	つ	さ	提	人	七	公
聞	の	に	ら	む	め	々	の	く	遠
て	啼	賣	す	ほ	か	は	日	さ	の
眠	也	珠	小	と	香	は	や	也	摘
ら	雑	した	し	に	や	青	芦	希	こ
ぬ	子	た	と	野	お	く	邊	前	是
も	の	る	岨	か	の	酔	を	室	ち
の	無	一	へ	ら	水	たり	さ	の	若
や	東	木	外	あ	と	毒	し	菜	菜
梅	西	か	た	ん	踏	の	こ	か	か
華		な	り	か	次	花	鶴	あ	あ
			花	小	の		四		
				若	用		五		
				菜	く		羽		
				哉	書				
故	花	新	眠	桃	祇	柳	對	和	五
一	口	釣	我	醉	壽	人	笑	春	全

鶴	も	春	散	鰻	人	柵	舟	水	待
下	の	野	時	の	め	に	か	底	岸
て	影	、	は	緒	か	に	ら	の	の
日	の	や	投	に	香	青	は	岩	方
和	あ	白	て	さ	を	葉	堤	に	遠
定	く	さ	行	葉	尋	や	を	も	ひ
の	く	と	や	春	深	春	は	若	あ
わ	く	の	五	の	て	の	し	の	う
か	く	に	つ	雨	字	あ	了	ひ	お
菜	足	は	は		居	な	柳	あ	不
茶	之	蝶	ま		か		か	り	ろ
丸	了	ひ	こ		な		あ	哉	月
	曉	こ	つ						
	月								
鬼	雨	踏	如	善	五	太	慎	鬼	是
秀	痕	我	雷	成	涼	喬	車	守	物

竿に つるゝもし らう 蜺か 存
 月の香の 浅か と 梅の 新端 裁
 又 香へ 綺を 戻し て 柳か 存
 床端に 日和 初し 捨ぬ 春か 存
 手折る せて 置て 蒔た る 椿か 存
 織る ぬ 日の 糸 静な らう いか の ほう
 し ら 粥に ぶた 一ひ 香の 薔哉
 何と なく 白ふ やう なり 朧月
 し しまし 雨か 々 庭の 椿か 存
 傘さして 旅人 ゆく や 春の 雨

旭窓 祇什 百翁 雁奴 希呂 子巾 松雨 卷耳 彭壽 臭汗

17.

春風 や 淋し さ 川に 帆か 舟
 鶏の くは へて 来た り ぬ は き
 梅の 香や 月と ぞ 十 けと 見え 隠小
 て ち け 恨に 隔て 親し らう
 眞や 知里 啼て やま の おく
 野の 梅や 古き 街ハ 有る か
 鶯の 業内 か ほと なく 安樂寺
 梅の 香の 畔に 人待 女か 存
 菜畠の うこ けは 湧て こて ぶ 卦
 帆か くの 水の 流は 川に 朝霞

風宿 蘭陵 百貢 文母 湖堂 雨孝 棹風 八十男 北市 花曉

春雨	田に	七く	春雨	も了	おく	乾お	鬼王	若西
や目	にし	さや	や奈	了月	水毛	やす	の心	西の
夢に	にも	や何	良の	の桂	毛斗	す竹	つく	葉く
白才	たは	か啼	鹿に	は青	大か	や起	くし	ひあ
築地	はむ	りし	ハ紅	し川	かた	しに	や	うい
より	江の	し庚	葉笠	柳	とく	人来	薺	か
	柳か	のり			く柳	鳥	粥	の
	な	り			かな			恋
線	家	杜 <small>女</small>	賢	白	喜	菜	有	東
里	望	涼	藏	清	芝	坂	玉	一

関は	前歳	兎の	はる	你悪	春雨		刺刀	ちか
また	や二	年	雨の	の破	や上		のあ	かり
ふ破	本	に	寒	風	踊		はせ	きも
こそ	て	弓	寒	に	を		こ	入
よけ	春	弦	寒	怖	う		、	春
水	ぬ	と	し	し	げ		ろ	た
猫	柱	強	に	猫	ん		ゆ	つ
の	教	し	本	の	時		む	柳
恋		几	の	こ	明		め	か
		巾	芽	ひ	り		の	あ
			裁				幸	
井	志	巨	右	萱	李	楚	一	芹
鯉	席	海	竹	水	明	水	色	魁

手ありの床几に正しぬ梅足哉
二見

姫松の影引懐し子の日か左
野菊

水鳥と音にこそし水おほる月
但糸

るすまがさかのり杉もとるる、露田哉
蘭室

葛谷の牛こそよけ小脆月
祇三

くくひすや暮んとして、最一聲
茨知

周白し出てゆく梅の影かすす
哥六

鶯よ踊うハ着せ去梅の室
紫鉦

えう臭や靴の跡を逃なかく
錦川

恙竹や轍の跡を逃なかく
送車

鶯に驚てさくにほひかな
求芝

梅董の墨も南の都か左
雲外

片杖は北俣ついたる梅の花
法梅

うか小せや浜懐の海苔に高足跡
斑象

うくひすは瓜とる例に初音哉
素丸

牙木は又余の舊のはつ音か左
宗瑞

うくひすや太刀踏おとすくしま山
嵐亭

被着た都のそうやおほる月
人左

海苔の香にこゝろ動きぬ 44 杖

雷 堂

降きたる君 雨霞 云ゆふか 赤

盤 古

かけろふや 栗しこ 行傘の上

吐 丹

五月は夜にこそ 糸下 梅の花

六 窓

腹まぬきぬ けはなし 雛子の聲

圓 竹

侘 郷

青柳にさへ ぬれりか 春の雨

上州高崎 田 耕

鳥の巣や 先を以て 行 埴 結 在 男 け 梅 の 白 ひ かな 一 文 字

武州坊西 西 羊

埴 結 在 男 け 梅 の 白 ひ かな 一 文 字

伊七郎 二 日 坊

あ の あ た り 三 笠 の 山 毛 臘 丹

越後荒井 踏 大

夕く小や音の 見えたる 白つは さい

上信 車 仙

蛙啼夜は 了り け 鳥 の 寝 意 哉

六 渡

奥州仙臺連中

白鳥スや 六月 ありは 氷室 川

檀 司

之ゆるる 水の 又な 水田也

夏 雲

吹入る 香を 織とめ 人窓の 梅

春 車

笹の葉に 風色 が見え ね 凡 中

車 明

鳥の巣も なる 宇に 之 けり 花 七 日

兔 耳

下總連中

淋し さい の 中 に 味 あり 春 の 雨

唯 我

献立の外に梅あり妹か君	筭の是にも落こわかなつこ	春風の魂あすけ木つ几巾	行もとり風もしたる、柳かな	夕陽や幽にこそく無めの風	鶯や藪のあちらは夕月日	うくひすの初音ひろはん小柴垣	蛤や口も戸さゝぬ浪のうへ	淡雪や梅の笑ひの中をあう
可	古	助	不	不	吏	芦	一	王
梁	水	水	威	王	鳥	川	今	梔

うくひすや先一聲ハ南かう	難波津に柳も咲や削かけ	雨も又青きためしや百々44	七裡や隣しふさ又五部	うくひすの三日月形に初音哉	眠たかろ柳のしありてあほろ月	44の名の雪るにははや一話の墓	うくひすのこ、ろ強くしかく小けり	干てある夜着の春や猫のあひ
鯉	有	空	眠	と	梅	玉	巴	巴
水	隣	々	江	の	ら	峯	水	陵

青柳やうねの瀬と春の川と成り

巴紅

鶯の十枝越えは日はく小ぬ

五風

ねろのふし梳りせし柳かな

松齋

下野麻呂連中

よくひすの室し頼すはつ音哉

槿馬

雪弓めうみらうふたつ若菜哉

女 函芝

一年除雪のちかやあほろ月

雁翁

青柳やあけし志うまゝ志笑の里

錦水

傘のふかく小あふてわか菜かな

狛舟

青柳の籠から落し揺かな

南秋 碩水

清くしの又ひとつあゝ凡中

蘭 碩

千金のほけ小はしめや春の雨

練江

春望

よくひすの料かと青し菜大根

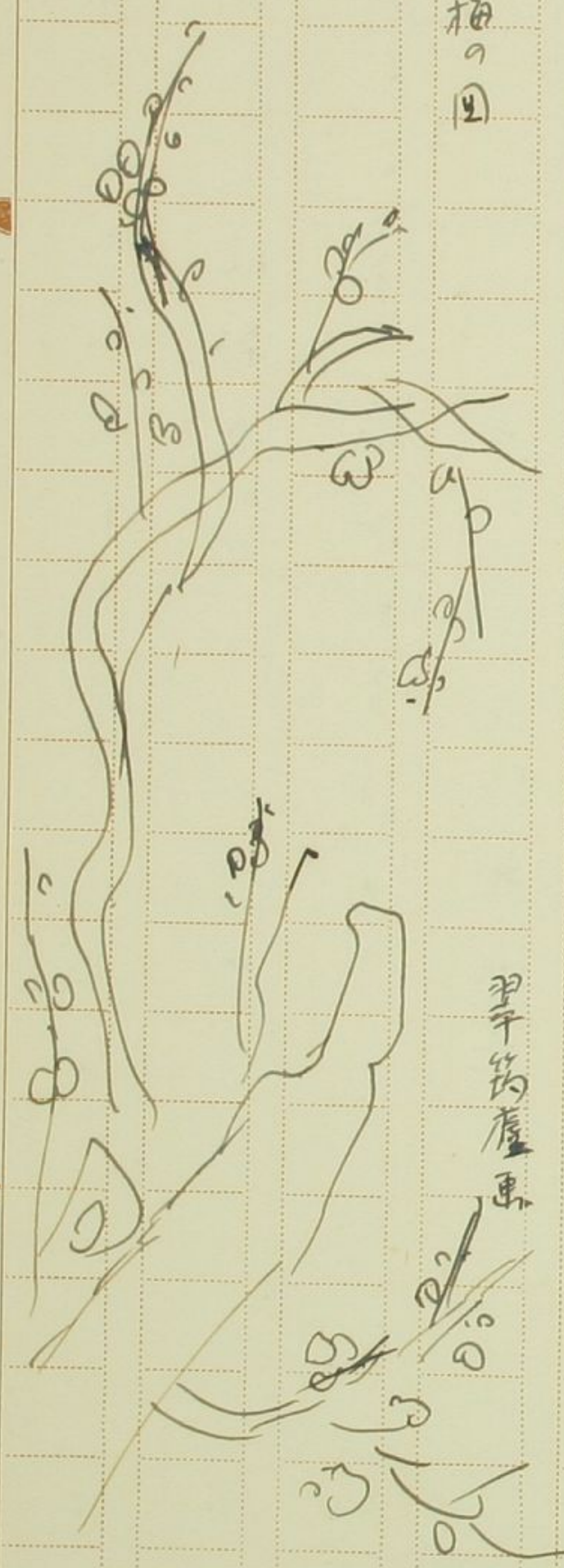
雪中 菘 菜 大

勤く山園に松とる斧のこたえけり

主あゝて鹿ぞあけ小猫の恋心

梅の園

翠筠庵東



歳旦

さうく にあひさうしつ初曆

春興

連の下ゆくれの氣氣春の風

年内立春

うくひすや立出は年の内

摩訶意語山

明和五戊子

跋

死札揮毫のしりへにはいかいの五味を書小た
了はかの筆に書を結ひて遠く言信一仙術手段
猫連かゝるし 此通事の趣門葉ふたりみたり
考訂し硯に紫の水を汲て江戸の旅寓に書

下毛州

瀬二居 倉河隣

不蘆 玉川

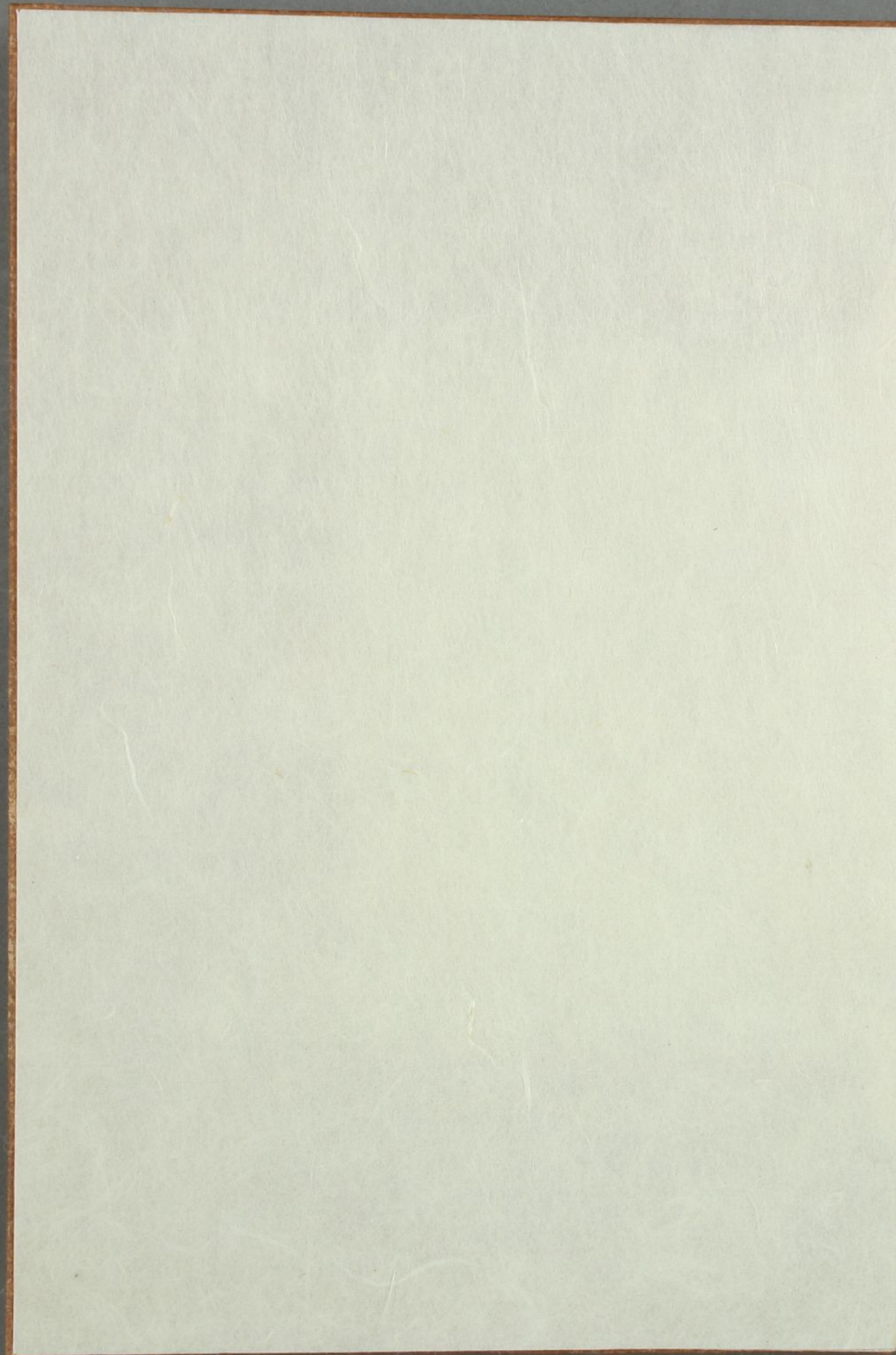
書林

江戸日本橋通武下目

戸くうや

喜兵衛

衛



MARUZEN I

